

二〇二四年二月九日

岡本の梅下りくれば学生街
杖一步一步と目指す梅の丘
チャペルの扉全開されて春立ちぬ

二〇二四年二月八日

万朶なる白梅朝日弾きをり
城壘の狭間狭間に草萌ゆる
日の洩れて雪解零の森の径
鉄塔のしもと埋めて野水仙
水平線鋼びかりや灘の春
検診の帰るさの道梅匂ふ

二〇二四年二月七日

豪邸の庭の高みに枝垂梅
春泥の長靴並ぶ集会所
老いたれどまだ使命あり春を待つ
古町の路地幾曲がり梅かほる
茅草を数珠なし垂るる雪解かな
茅渟の海見えて遙けし梅の丘
補助輪のとれたる吾子に風光る
春光に翼翻し鳶の舞ふ

二〇二四年二月六日

恙無く句友揃ひて初句会
池涸れて那智黒の底露はとす
幾度も真夜に目覚むるしづり雪
春泥に吟行子らの靴の跡

あひる
うつき
むべ

満天
ぼんこ
康子
そうけい
うつき
満天

わかば
みきお
うつき
澄子
康子
あひる
みきお
素秀

せつ子
ぼんこ
澄子
あひる

ハンドル怖しつるつるに凍つ雪の道

雪を搔くスコップ夫の山道具
醜草かはた名草かも双葉出づ
水鳥の楽園となり池広し

二〇二四年二月五日

壺の椿ふつくらと紅ふふみたる
子どもらの太鼓跳ね打つ節分会
川沿ひに並ぶ湯宿の雪あかり

二〇二四年二月四日

蕉翁の石像冴ゆる中尊寺
春水に逸る水車は蕎麦を打つ
立春の風に銀輪機嫌よし
絶景はホワイトアウト雪の窓
太鼓打つポニーテールや節分会
老農の鍬高々と春田打つ
姦しき句会の卓に春日燦

二〇二四年二月三日

春光を汲みては溢つ水車かな
涅槃僧世界平和を説かれけり
さざ波を分けて寄りくる番鴨
暁光に現るる伊吹の雪の嶺
一会人焚火囲めば知己のごと

千鶴
むべ
明日香
わかば

満天
康子
千鶴

千鶴
むべ
せいじ
千鶴
むべ
みきお
康子

澄子
うつき
みきえ
隆松
かえる

毎日句会みのもる選・二〇二四年二月二日